

苫小牧市におけるアイスホッケーの活性化に関する一考察

中島 広基*・関 朋昭**・川上 光博***
菅沼 淳子****・館岡 正樹*****

A tentative plan for activation of ice hockey in Tomakomai

Hiroki NAKAJIMA, Tomoaki SEKI, Mitsuhiro KAWAKAMI,
Junko SUGANUMA and Masaki TATEOKA

Abstract

The decrease in the number of ice hockey players is now a serious problem in Tomakomai. In this paper, the tentative plan for activation was performed in terms of the elementary school ice hockey federation in Tomakomai, the ice hockey federation in Tomakomai, and cultural history of ice hockey in Tomakomai.

1. はじめに

現在、苫小牧市におけるアイスホッケー競技は、確実に衰退の兆しを見せている。少子化の影響はいかなる競技においても同様の影響を受けるが、中島ら¹⁾が調べたアイスホッケー競技人口率の低下は少子化の影響以上に競技ばなれが起こっていることを示すものであり、早急な対応が求められる状況であることに、もはや疑いを持つ余地のないことを結論付けた。

日本アイスホッケー界のトップリーグである日本リーグでは、参加チームの当番制で営まれてきた日本リーグ運営委員会を発展させ、独立した事務所を都内に開設し、新たな試みを模索している。新運営委員会は、これまで2年連続で開いた独自事業の「オールスター戦」を成功させ、2003年1月には、伝説の「岩倉：王子」OB対決を苫小牧市で実現させることで老若のファン動員につなげるなど、日本アイスホッケー界を上から改革する行動をスタートしている。さらに地元王子製紙アイスホッケー部は昨シーズンから、ユニフォームに苫小牧市のマークを入れることで「わが街のチーム」を市民・選手にアピールした。また、報

道機関の動きも活発化し苫小牧の地域紙では特集を組み市民らにアイスホッケーの諸活動を1面で積極的に伝える企画も実施された。このような動きは市民に対する効果的なアピールであり、サポーター発掘の一助となることは間違いない。さらに、サポーター（観客）が増えることでアイスホッケーの注目度が増し、結果的に競技人口も増加してくることは十分に期待できるだろう。しかしながら、こういった流れを受けて競技人口が増加するには数年単位の時間が必要であり、即効性を期待できるものではない。前述の方策に加え、競技人口減少を食い止め増加に転じさせる方策、すなわち小学生の加入率を高めるための「行動」が今こそ求められているのではないだろうか。

本報では、アイスホッケーを取り巻く厳しい現実（ピンチ）を受け止めながらも、それを逆に改革のチャンスと捉え、ちびっこアイスホッケー組織、苫小牧アイスホッケー連盟事業、歴史文化の継承という、3テーマそれぞれについて著者の考える基本的な改革プランを提示することで、苫小牧市のアイスホッケーを活性化する一助となることを目的とした。

2. 本 論

2. 1 現 状 把 握

苫小牧市のアイスホッケー競技人口の減少を食い止め、増加に転じさせるためには、その入り口である小学生の競技人口に着目し対策を考えてゆ

* 助 教 授 一般教科
** 助 教 授 一般教科
*** 技 官 (技術専門職員・一般教科)
**** 非常勤講師 苫小牧高専・一般教科
***** 講 師 釧路高専・一般教科

くことが重要となる。表1に2003シーズンの小学競技人口を示した。本表作成に当たっては2003年9月実施の小学生アイスホッケー大会参加者名簿²⁾を参考にした。この大会は1～6年生全ての競技者を学年単位の3グループに分け実施するため、連盟登録選手の全てが参加可能な大会となっている。したがって、市内小学生のこの時点での競技人口を最も正確に反映しているものと考えたためである。

中島らの調査¹⁾により、苫小牧市内ちびっ子の競技人口および競技人口率が低下していることはすでに判明している。この調査の中で、平成12年度の小学競技人口は男子342名女子61名の計403名であった。本調査段階での競技人口が男子248名女子47名の計295名となっており、わずか3年で108名(その殆どが男子児童)の減少となっている。データの元となっている資料が異なるため確定した考察はできないものの、前回調査後のここ数年で、苫小牧市におけるアイスホッケー離れが加速してきていることは間違いのない事実といえる。

さらに深刻なのは学年毎の競技人口である。6年生：97名、5年生：69名、4年生：45名、3年生：42名、2年生：26名、1年生：16名と、学年が下がるにつれて確実に低下していることが分かる。市内には幼稚園を中心とするチーム等がいくつかあり、その中には3年生以下の小学生が所属している場合もあり、1・2・3年生については今後若干の増加は見込まれるであろう。しかしながら、これまでの加入状況等から見て、4年生以上の学年で新規加入の見込みは非常に少なく、このままの状態で推移した場合、2年後には市内全体の競技人口が170名程度にまで減少する可能性も否定できない。つまり2年後(2005シーズン)には、「泉野・日新・豊川・錦岡・澄川・明徳合同アイスホッケー同好会」などということが現実

化しようとしているのである。これまでは、学校単位を基本とする同好会編成がとられ、単一小学校での編成が困難になった集団に限り合同チーム化する流れで進められてきたが、「減っては集まり」を繰り返す従来の方法を続ける限り事態の好転を期待できる要素はない。

では、なぜこのような事態を招くことになったのか。著者が知り得た情報から考えられる原因の中から主だったものについて列記する。

- ① 少子化傾向による児童の絶対数減少。
 - ② 時代の変革に伴い、保護者の趣味に対する価値観も多様化し、自分の時間を重視する傾向が強まった。
 - ③ 不景気の影響を受け、活動に必要な金銭的負担を感じる親も多い。
 - ④ 送迎・水撒きなど、時間的体力的な負担を強く感じる親が多い。特に送迎は、室内リンクの増加に伴い頻度が激増している。
 - ⑤ 過去には当たり前だった夏冬の複数クラブ掛け持ちが、アイスホッケーシーズンの通年化に伴い種目の択一を迫られるようになり、集団競技同士で結果的に選手の奪い合い現象が起こっている。
 - ⑥ 気楽に遊べるリンクが減少し「遊びでやってみたら面白かった」という動機付けで入部するケースも減少している。また、学校リンクはホッケー部保護者の全面協力の下で作るため、学校の施設でありながら授業以外で使いつらい教師側の遠慮もある。
 - ⑦ 苫小牧市におけるアイスホッケー(スケート)が街の文化であるという意識が急速に薄れ、逆に非協力的なムードが強まっている。
- これら以外にも実業団アイスホッケーの低迷など数多くのマイナス要素は存在すると思われる。特に①②③の要素については国の社会情勢などに

表1 2003シーズン苫小牧ちびっ子アイスホッケー競技人口

	6年生			5年生			4年生			3年生			2年生			1年生			全学年		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
MITマイティースターズ(明徳・糸井・大成)	9	0	9	6	0	6	4	0	4	2	0	2	3	1	4	0	0	0	24	1	25
泉野・日新アイスホッケー同好会	4	1	5	7	0	7	5	0	5	4	1	5	1	0	1	0	0	0	21	2	23
若草小アイスホッケー同好会	4	0	4	3	1	4	0	0	0	3	2	5	1	0	1	0	0	0	11	3	14
明野・鶴川合同アイスホッケー同好会	13	2	15	6	3	9	3	2	5	1	1	2	2	0	2	0	0	0	25	8	33
北星小アイスホッケー同好会	6	1	7	5	1	6	1	1	2	3	0	3	3	0	3	2	1	3	20	4	24
緑小アイスホッケー同好会	6	2	8	9	1	10	0	0	0	2	2	4	4	0	4	0	0	0	21	5	26
澄川小学校アイスホッケー同好会	5	0	5	4	0	4	4	0	4	3	1	4	0	0	0	1	2	3	17	3	20
豊川小学校アイスホッケー同好会	2	1	3	1	2	3	5	1	6	0	1	1	1	0	1	1	0	1	10	5	15
東小・西小合同アイスホッケー同好会	3	1	4	7	0	7	1	1	2	5	3	8	1	0	1	4	0	4	21	5	26
美園小学校アイスホッケー同好会	10	2	12	5	0	5	2	0	2	0	0	0	3	0	3	0	1	1	20	3	23
清水小学校アイスホッケー同好会	9	0	9	2	0	2	0	0	0	1	0	1	2	0	2	0	2	2	14	2	16
沼ノ端アイスホッケー同好会	11	1	12	5	1	6	7	1	8	2	0	2	2	1	3	1	0	1	28	4	32
錦岡小アイスホッケー同好会	3	1	4	0	0	0	7	0	7	4	1	5	1	0	1	1	0	1	16	2	18
	85	12	97	60	9	69	39	6	45	30	12	42	24	2	26	10	6	16	248	47	295

も大きく影響を受けるものであり、即座に改善してゆくものではないかもしれない。しかし、その他のマイナス要素については、方法次第によっては解決可能なものと著者は考えている。

次項からは、具体的な解決策について3つの観点から著者なりの考えを示す。

2. 2 ちびっ子アイスホッケー組織の再編

減っては集まりを繰り返す現行の組織作りでは、常に集団は小集団となり、何か変化を起こそうと思ってもできることには限りがある。したがって、現行の合同チームの流れを続けていても事態の好転は望めない。逆に、大きな集団を形成することができれば、スケールメリットを活かす運営が可能となり様々なグループ編成やプログラム提供も行えるようになるのではないだろうか。では、スケールメリットを活かすためには実際にどのような組織を編成してゆけばよいだろうか。

苫小牧市には西地区にときわスケートセンター、中部北地区にハイランド屋内スケートリンク、中部南地区に白鳥アリーナ・王子スケートセンター、東地区に沼ノ端スケートセンターが配置されている。この内、民営の王子スケートセンターを除く4ヶ所の市営室内リンクは、苫小牧市を東西南北に4分割するかたちで配置されている。著者はこれら4ヶ所のリンクをホームリンクとするクラブ編成を基本プランとして考えている。その構成図を図1に示す。

クラブ組織は苫小牧市全体で1つとし、その下部組織として支部クラブを創設する。クラブの総括運営については、現存の苫小牧小学生アイスホッケー同好会連合会組織をそのまま活かすこと

で、大会運営等でも現在のシステムを大きく変更する必要もないためスムーズな移行が可能となる。今年度小学競技人口の295名を単純に4分割すると1支部クラブあたりのチーム人員は約74名となる。各支部クラブに、レベル分けした20名程度の複数チームをつくることで、等質に近いチーム形成が可能となり、今までにない効率の良い練習メニューが実現する。また、体育協会で推進中のスポーツリーダーバンク制度を活用し指導スタッフを各クラブに配置することで、クラブ内での一貫した指導内容を確立することも可能となる。また、チーム人員（支部クラブ員）が多くなることでクラブ全体の帰属意識も強まり、大会などでの保護者等を含めたサポーターも増え、大会開催時の会場の雰囲気が高まることも期待できる。ユニフォームもクラブデザインで統一することで、一着あたりの単価も抑制され、今のようにチーム編成が変わるたびにユニフォームを新調する必要もない。練習用具なども共同で利用できるものは多く、運営経費の軽減が可能となる。さらに、ホームリンク制度により場合によっては学校リンクを使用する必要がなくなり、いわゆる「リンクの水撒き」から保護者を解放することも可能である。チームで使わなくなった学校リンクは、教育委員会や町内会組織らの協力も得ながら本来の使用目的である児童の授業および近隣地域の子供たちの遊びスペースとして解放し、氷上遊びの面白さを広く味わうことのできる空間とすることができ。このような気軽に使えるリンクが増えれば、多くの子供がホッケーに触れる機会を与えられ、「やってみたい」という欲求も高まるものと考え。たとえそれらの子達が選手として登録をしな

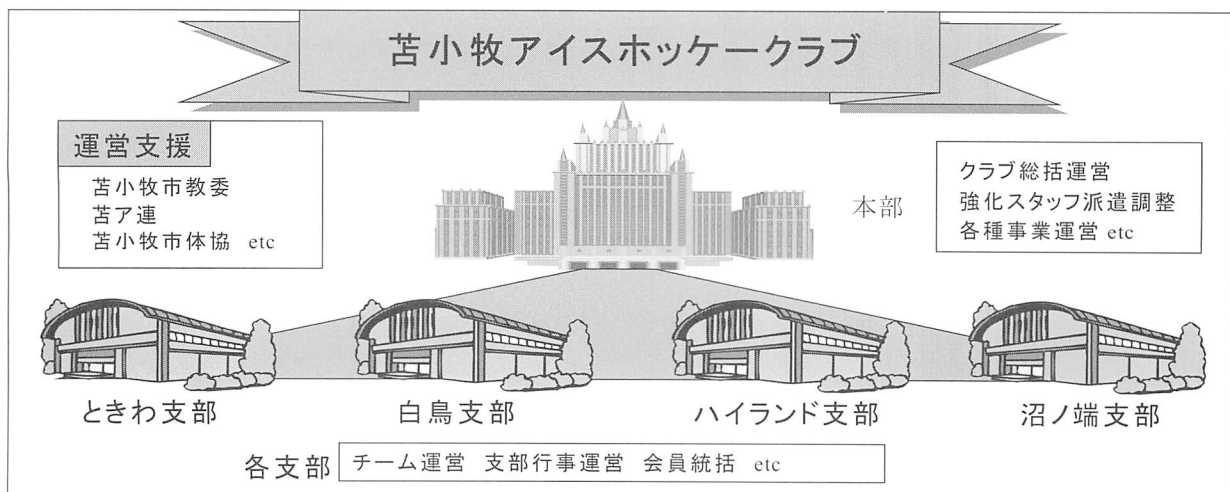


図1 アイスホッケークラブ組織図

かったとしても、楽しさをわかっている人口が増えれば、「アイスホッケー愛好人口は増える→愛好人口が増えれば競技自体の盛り上がりは増す→競技が盛り上がりれば子供たちからの注目度はさらに向上する→注目度が向上すればやってみたいという欲求はさらに高まる」という好ましいサイクルが出来上がるのではないだろうか。

この組織編制は、他の競技種目との連携やクラブ員の年齢構成を広げてゆくことで、必要に応じて文部科学省がスポーツ振興計画で提唱している総合型地域スポーツクラブへの移行も可能であり、昭和41年全国に先駆けてスポーツ都市宣言をした苫小牧市のスポーツ中核組織にもなり得るものと著者は考えている。さらに現在、苫小牧市でも行動計画策定作業が進行中の次世代育成支援対策推進法の仕組みをうまく取り入れることができれば、企業や公的機関からの人材派遣や高齢者の事業参画も今まで以上に容易となる。

しかし、この案には現時点において非常に大きな問題点が存在することも事実である。ときわスケートセンターおよび沼ノ端スケートセンターは4・5月を除き通年スケートリンクとして使用可能だが、ハイランド屋内スケートリンクは夏期間をプールとして利用するため4～9月は氷上練習ができない。また、白鳥アリーナも軽スポーツ利用のため4～6月は氷上練習ができない。市営リンクをホームリンクとする本案の場合、「シーズンインをどの時期からにするのか」「一定期間はホームリンク制度を崩すのか」「王子リンクをどのように活用するのか」など、空白の期間の解決方法が非常に大きなポイントになると言える。

なお、本報では各支部クラブについて、開始当初は市営リンクのみをホームリンクとする4支部クラブとしているが、競技人口の増減に応じて柔軟な組織編制をすることが肝要である。

2. 3 連盟事業の役割

上項ではちびっこアイスホッケーの組織再編による手法提案を行った。ここでは、連盟事業に視点を移し、連盟主導による競技人口増加策について考察を進める。

これまでも苫小牧アイスホッケー連盟は、日本アイスホッケーの中核組織としてその役割を十分に果たしてきた。日本リーグのオフィシャル業務も常に他地区をリードし改革等も進めてきた。では、この先日本のリーディング組織としてどのような行動が求められているのだろうか。

苫小牧アイスホッケー連盟事業は、総務・競技事業・強化・レフェリー・医事・女子・インラインの7委員会により運営が行われている。

このうち強化委員会には平成14年度普及強化費として12の事業に対し110万円の予算が配当されている³⁾。本報で着目すべき点は競技人口の増加であることから、普及に関しての予算執行状況について着目した。平成14年度事業で普及にかかわる予算執行は、小学生アイスホッケー普及強化練習(数回)と中学生アイスホッケー普及強化練習(数回)の以上2事業であった。この2事業については他のメンバー選抜による強化練習とは異なり、希望者を募集しての実施のため、初心者にも参加可能な練習会である。しかし、実際にチームに属さない初心者の参加は殆どなく、すでにアイスホッケーの門をくぐった子供たちの練習会という意味では、普及に貢献している可能性は低いといわざるを得ない。

競技人口の加速的な低下が進む現在、連盟事業も「加入した選手の強化」と同様に「普及活動」へも一層重きを置いた事業改革が求められているのではないだろうか。しかし、一口に普及のための事業改革といってもアイスホッケーの面白さを、アイスホッケーを通じて伝える直接的な方法では大きな効果は期待できない。

組織の枠にはまることなく自由な空間と自由な発想で行われるスポーツが増えている現在、これらを利用して間接的にアイスホッケーの面白さを伝える方法もあるはずである。たとえばインラインホッケーは苫小牧でも連盟(インライン委員会)主催をはじめいくつかの大会が企画され成人を中心に実施されている。しかし現在は市内B級参加選手を中心としたハイレベルな大会のため、初心者が参加できるような大会にはなっていない。こういった大会を初心者や子供たちも参加しやすい仕組みにアレンジして企画してあげるのも間接的な底辺拡大に効果を出すものと考えられる。この他にも陸上ホッケー、3 on 3アイスホッケーなど「できるだけシンプルにアイスホッケーの面白さが伝わる遊び」を企画し、小学校などで出前開催するなど多様な発想でプログラム提供をするのも同様の効果が期待できるのではないだろうか。これらの企画における連盟の目的は「多くの子供たちに連盟の活動を知ってもらい、その中からアイスホッケーに興味を持つ子供の発掘ができる」ことで十分なのである。

2. 4 歴史文化の継承

平成15年度苫小牧アイスホッケー連盟理事会・評議員会で新会長に就任した石橋氏は、その挨拶の中で「アイスホッケーは苫小牧市の文化である」と明言した。苫小牧市においてアイスホッケーが文化であるという認識は、アイスホッケー関係者や全盛期を知る市民の間では違和感のないことだと思われる。また、苫小牧市を知る市外・道外の人たちにとっても、苫小牧といえば「工業都市」「紙の街」「港湾都市」と並び「アイスホッケーのメッカ」というイメージは強いと思われる。しかし、全盛期を知らない近年の若い苫小牧市民にこの言葉が受け入れられるのかといえ、甚だ疑問である。何となく文化のような気もしながら「具体的に何が文化なのか？」と聞き返されるのが落ちて、聞かれた側もおそらくは説明に困るであろう。

著者が知り得るだけでも苫小牧スケート協会記念誌⁴⁾や日本スケート連盟発刊のスケート発達史などの機関誌⁵⁾⁶⁾をはじめ、苫小牧市⁷⁾や王子製紙⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾あるいは個人が発行したスケート史関連の書物¹¹⁾¹²⁾¹³⁾は少なからず存在し、苫小牧市が関連する歴史事実やエピソード等が数多く紹介されている。しかし残念ながらこれらの書物は一般市民の目に触れることは少なく、存在すら知らない市民が殆どといえる。結局のところ苫小牧市のアイスホッケー文化は、漠然としたイメージで語られているのが現状といわざるを得ない。このような認識の中で、市をあげてスケート競技を盛り上げてゆこうと声を上げて、市民からすれば「なぜスケートだけを特別扱いしなければいけないのか？」と疑念を持つのも当然である。しかし、苫小牧のスケートを取り巻く歴史事実は変わることなく存在し、それらを目の当たりにしたとき、近代苫小牧の歴史は王子製紙苫小牧工場の歴史とともに始まり、スケートに親しんできた多くの苫小牧人とともに歩んだ歴史であることが理解できる。この理解を深めることができれば、誰から見てもスケート、中でもアイスホッケーは苫小牧の文化であり、他の市町村が決して追いつき追い越すことのできない歴史財産ということが分かる。

この優位性を最大限に活かし、苫小牧市を名実ともに「氷都」「メッカ」と位置づけ、スケートの全てがわかる街とすることができれば、観光資源に乏しい苫小牧市にとって経済的にもメリットが出てくるのではないだろうか。幸い、苫小牧市において歴史資料は数多く存在する。苫小牧市博物館には1993年12月31日段階でスケート関連資料

が1,054件、1,179点所蔵され¹⁴⁾、市図書館にも関連書籍や記録などが保存されている。さらに王子製紙所蔵のアイスホッケー関連資料も数多く存在している。これらの資料はそれぞれ一部分が、博物館では2階中央フロアに、図書館では2階資料室に、王子製紙では優勝カップ等が王子リンク正面玄関内の陳列ケースに収められ来場者の目に触れている。これら歴史資料をさらに効果的に整理し陳列する方法は考えられないだろうか。別に博物館を新設しなくても幾つかの方法は考えられる。博物館内のコーナーを増設する方法、王子製紙のリンク自体に博物館的な機能を付加する方法、白鳥アリーナの資料展示コーナーを増設する方法。大切なことは、それぞれの機関が別々に小さなコーナーで展示を行うのではなく、関係各機関が互いのセクトに拘らず、「全てがわかる」資料展示や催事を行うことだと考える。

一方、日本スケート界ではこれまでに多くの名選手や競技記録が残されてきた。このなかには苫小牧市出身の選手や団体も多く含まれている。ラクスマン¹⁵⁾が根室港でスケートを滑った寛政4年(1792)から211年。札幌農学校に氷友クラブが組織され日本にスケート文化が発祥してから126年。日本のスケート界は、歴史を築いた数多くの人物や団体を称え、永く後世に伝える「スケートの殿堂」が設置されてもおかしくない時代を迎えた。日本のアイスホッケー文化を伝えるアイスホッケー殿堂を「メッカ苫小牧」に誘致し、苫小牧市のアイスホッケー文化継承機能と融合させることができれば、市内外の注目度が一層向上することも期待できる。

3. む す び

ここにあげたプランは一つの例であり、当然ながら全てがこのとおりに進まなければならないというものではない。また、このプランを実施するにしても、スポーツリーダーバンク登録指導者の不足、幼稚園や個人集団で運営している団体との兼ね合い、学校単位で行われている大会との兼ね合い、事務局(本部)負担の増加、連盟事業拡大に伴う事業費負担の増加、全体像が見えてこない総合型地域スポーツクラブ構想などをはじめ、解決しなければならない問題点が数多く存在するのも事実である。しかし、現状把握で述べたとおり、このままでの事態好転が望めない現在、「新たな何かを始めて動き出す」ことが最も重要なことで

はないだろうか。日本リーグでは日本リーグ運営委員会を中心とした新たな試みが次々に行われ、地元王子製紙アイスホッケー部も部員総出の広報活動を行い、地元紙では連日アイスホッケーに関する特集や企画を掲載し、小学校の保護者たちもそれぞれにできることを必死に模索し実行している。アイスホッケー関係者がそれぞれではあるが、一様に感じている危機感は、ピンチをチャンスに変える原動力に他ならない。今必要なのは、この「それぞれの力」をいかにして連動させてゆくかを考えることである。今こそ「氷都苫小牧」の真価が問われているのではないだろうか。

本報では、アイスホッケーを文化として捉えその文化継承に関わる考えも示した。その際、数多くの文献や資料に接したが、それら資料からは著者自身も含めたアイスホッケー関係者が真摯に反省すべき点があることも感じられた。苫小牧市のアイスホッケーの誕生期や発展期において、アイスホッケー界は常に娯楽として市民と共にあり市民と共に歩んできた。しかし発展充実期を迎え、アイスホッケーは誰もが親しめる娯楽から、限られた者や場所で行われる特別な競技へと変貌してゆく。日本リーグでは“会場内飲食禁止”や“フラッシュ撮影禁止”など観客に対する規制が強まるなど、競技者中心思考が強まった結果「お行儀よく観戦すべきもの」となり、高校では「アイスホッケーを頑張った結果、大学に行かせてもらえた」という感謝の時代から「上手くなれば大学に行けるのは当然」という権利の時代となった。我々アイスホッケー関係者はいつしか市民あるいは友人らに対する感謝の気持ちを忘れていたのではないだろうか。本来、文化とは押し付けるものではなく自然と作り上げられてゆくものである。衰退・低迷期を迎えた現在、関係保護者や選手・連盟役員・教育委員会等、様々な関係者が市民を意識した行動を起こし始めたのは、関係個々人の中で著者と同一ような思いを持つ人々が増えてきた表れであり、これらの行動は苫小牧市におけるアイスホッケー文化再構築の始まりとも言える。

本報では、アイスホッケーの活性化を目指し、入り口である小学生アイスホッケー組織の再編、それを支える連盟事業の役割、それら全てを支える市民への歴史文化の継承という3つの柱で考察を進めた。著者としては、ここに掲げた3プランが一つの起爆剤となり、関係機関等で活発な議論が行われながら、スポーツ都市宣言施行37年を迎えた苫小牧市におけるこれからの方向性を探

る一助となれば幸いである。

2006年、苫小牧市で第26回冬季国民体育大会スケート・アイスホッケー競技会が26年ぶりに開催されることになった。全国から集まるスケートファンを迎えるアイスホッケーのメッカとして、競技だけではなく「スケート文化の中核としての苫小牧市」をどれだけアピールできるか。著者は、その行動の先に苫小牧市のスポーツ文化の未来が見えてくると確信している。

本研究遂行中、日本スケート界に多大な貢献をされ苫小牧市スケート文化継承にご尽力された友成真七氏が御逝去された。本論文のむすびにあたり、あらためて故人の御功績に敬意を表し、謹んで御冥福をお祈りいたします。

参考文献・資料

- 1) 中島広基, 関朋昭, 川上光博, 館岡正樹; 苫小牧市におけるアイスホッケー競技人口の推移, 苫小牧工業高等専門学校紀要, 第38号, PP219-224, 2003
- 2) 第4回マクドナルド杯争奪第6回オータムチャレンジ強化リーグ杯争奪小学生アイスホッケー大会プログラム PP5-16, 2003
- 3) 平成15年度理事会・評議員会議案書; 苫小牧アイスホッケー連盟, 2003
- 4) 苫小牧スケート協会創立60周年記念誌「60年の歩み」; 苫小牧スケート協会, 1986
- 5) 日本のスケート発達史; (社)日本スケート連盟, 1981
- 6) 日本スケート史; 日本スケート史刊行会
- 7) 苫小牧市史 下巻; 苫小牧市, 1976
- 8) 王子製紙社史; 王子製紙株式会社, 2001
- 9) 五十年の歩み1910-1960; 王子製紙株式会社 苫小牧工場, 1960
- 10) 新王子アイスホッケー部創立70周年記念-70年の歩み-; 新王子製紙株式会社 苫小牧工場, 1996
- 11) 友成真七; スケート物語 (戦前編), 苫小牧郷土文化研究会, 2001
- 12) 田中 正; 氷上の闘魂譜, 円子出版, 1987
- 13) 辻 俊一; その男西田信一, グリーン書房, 1977
- 14) 苫小牧市博物館所蔵資料目録8 スケート資料目録; 苫小牧市博物館, 1994
- 15) 魯齊亜; 刈谷市中央図書館蔵

(平成15年11月28日受理)